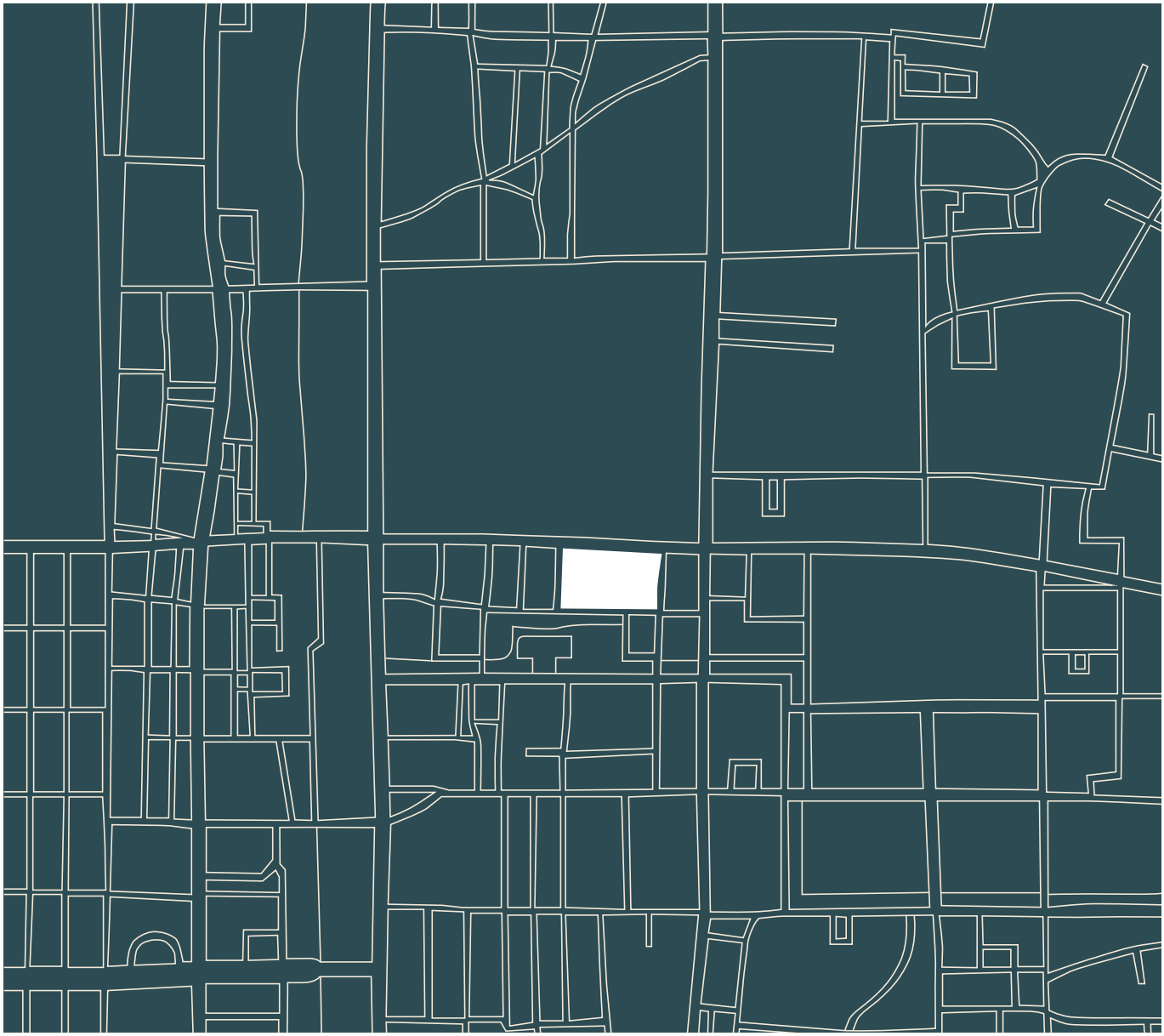
特集② 自治寮と、「日常記憶地図」



インタビュー (熊野寮) : 2024/9/21
インタビュー (サトウアヤコ氏) : 2024/7/24
聞き手 : 岡本陸、小川泰地、川村宗生、川本晃、閑念真優、早川真優子

熊野寮生の日常をとらえる

本誌の「自治寮と、暮らしの姿」では、全国のさまざまな自治寮の内部や実情に迫り、明らかにした。その一方で、本特集では熊野寮を対象に、自治寮の内部に限定せず、熊野寮が立地する街についても焦点を当てていく。

熊野寮が位置する京都市左京区（京都大学吉田キャンパス周辺）を中心とした街において、熊野寮生がどのように街と関わってきたのか、サトウアヤコ氏の「日常記憶地図」という手法を用いて、一人一人の日常に迫っていく。

1970 年代　木村さんの「日常記憶地図」 62p
1980 年代　黒田さんの「日常記憶地図」 64p
2000 年代　松田さんの「日常記憶地図」 66p
2010 年代　前田さんの「日常記憶地図」 68p
座談会 :「日常記憶地図」を共有してみる 70p
サトウアヤコ氏　インタビュー 72p

本企画に実施にあたり、4 名の元熊野寮生の方々にご協力いただいた。4 名の方はそれぞれ「同釜会」と呼ばれる熊野寮における同窓会に属している。本企画で熊野寮生の主観的な記憶を取り扱うにあたり、新しい記憶ではなく無意識に体に刷り込まれた潜在的な古い記憶に焦点を当てるため、同釜会に属している方で入寮時期が現在 (2024 年) から 10 年以上前となる方を対象とした。加えて、それぞれ入寮時期が 10~15 年ほど離れた 4 名の記憶を取り扱うことで各年代における場所の記憶を呼び起こすとともに、変化する熊野寮周辺とそのかかわり方について探求していく。

※あくまで個人の記憶に関するものであり、事実とは異なる場合があります。

「日常記憶地図」という手法

本企画においては、サトウアヤコ氏の「日常記憶地図」という手法を用いて、熊野寮生の日常を見ていく。「日常記憶地図」とは、ある時期の日常生活の記憶を地図をなぞることで呼び起こす手法である。地図を用いて記憶を語ることによって、普段は思い起こされることのないような「弱い記憶」が、当時の風景とともに想起されて、当時の世界を俯瞰的に振り返ることができる。日常的な記憶や出来事などを言葉や文字だけではなく、地図上に視覚的に記録することで、記憶の整理や他人への共有を可能にしたり、自己理解を深めるきっかけとなったりする。

本企画における「日常記憶地図」の作成手順

以下に「日常記憶地図ノート」を参考にした「日常記憶地図」の作成手順を示す。

0. 地図を準備する

自宅 (熊野寮) を起点に、よく訪れた場所が含まれる範囲のできるだけ当時に近い地図を準備する。本企画では「エリアマップ京都市 (1978)」「ニューエスト京都府都市地図 (1999)」「都市地図京都府京都市 (2011)」（昭文社）を用いて、京都大学吉田キャンパスと熊野寮周辺を範囲とした。



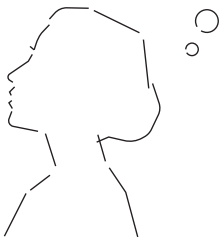
1. 地図の「よく行く場所 / 道」をなぞる

用意した地図に「家」「よく行った場所」の印をつけ、「よく歩いた道」をなぞる。縮尺の異なる地図、熊野寮内平面図を用いて日々の行動をふりかえる。なぞるという過程がその場所の記憶を呼び起こすきっかけとなる。



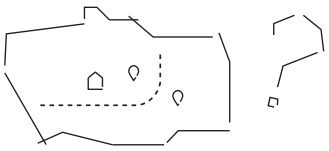
2. それぞれの「場所の記憶」を思い出す

それぞれの場所や道について、なぜよく行っていたのか、理由や習慣、記憶を思い出す。寮生が寮周辺の街とどのように関わっていたのかをお話ししていただく。



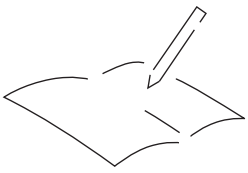
3. 愛着のある場所を思い出す

「愛着のある場所」があれば、それがどこか考える。具体的な場所をひとつ選んでもらい、その場所についてお話していただく。



4. ふりかえる

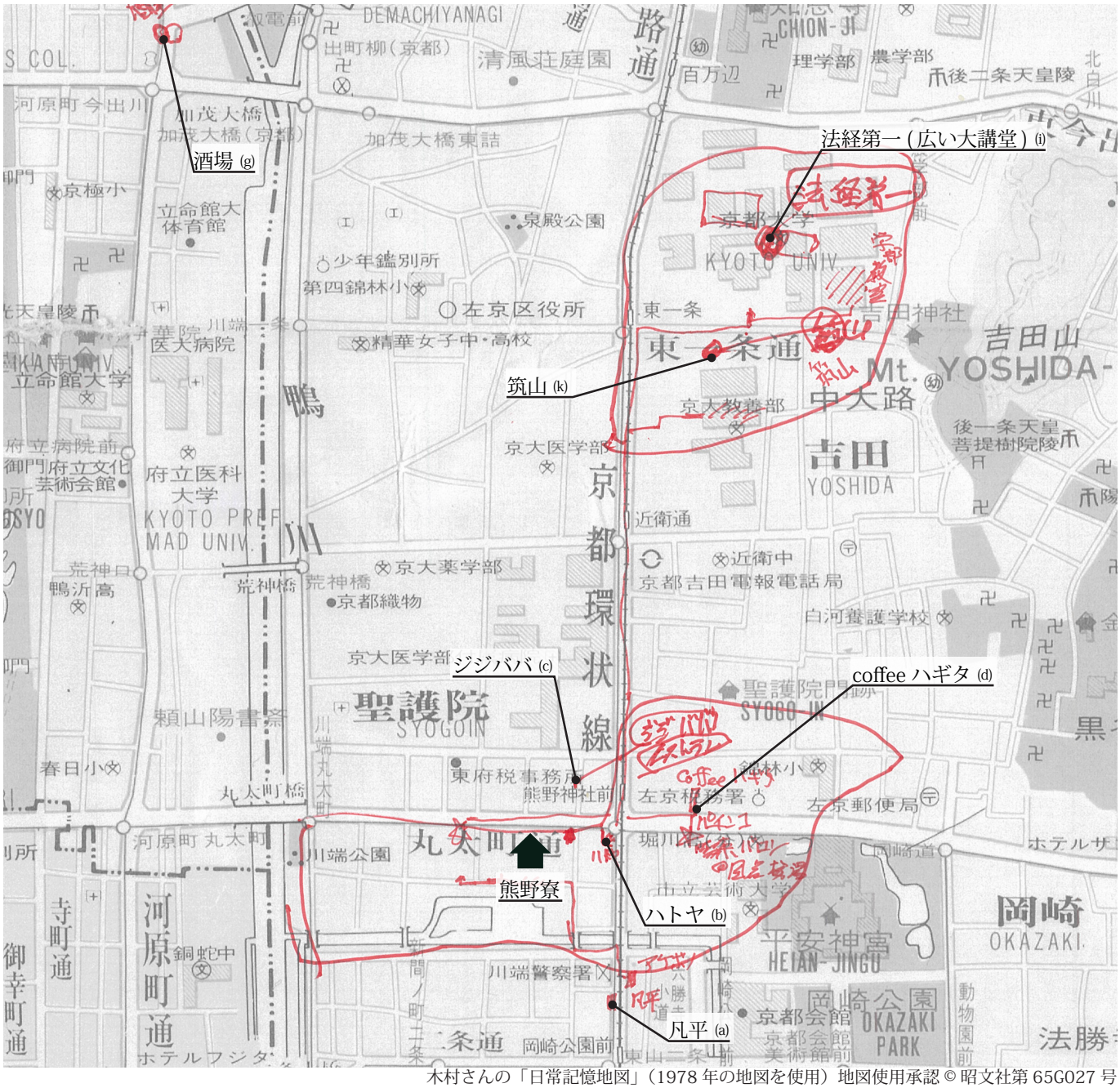
当時の生活圏を囲み、これまでの過程で気がついたことをふりかえる。今回は、個人での振り返りに加えて、4 名の「日常記憶地図」を共有する座談会を行う。各年代の違いや共通点を分析し街との関わり方を読み解いていく。



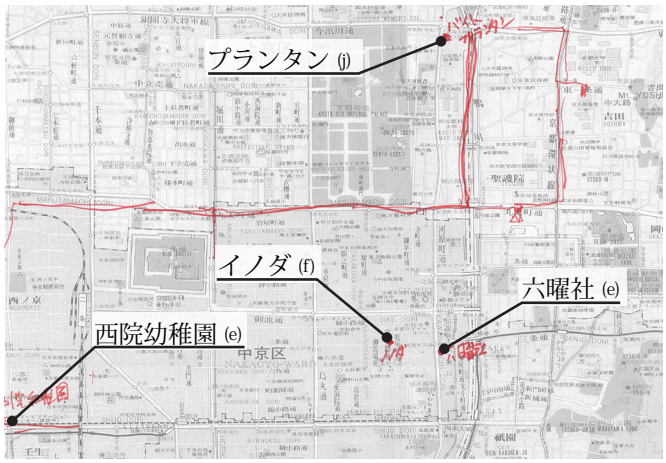
サトウアヤコ「日常記憶地図ノート」(2024) より (https://my-lifemap.net)

デザイン・イラスト：KOTANI DESIGN OFFICE

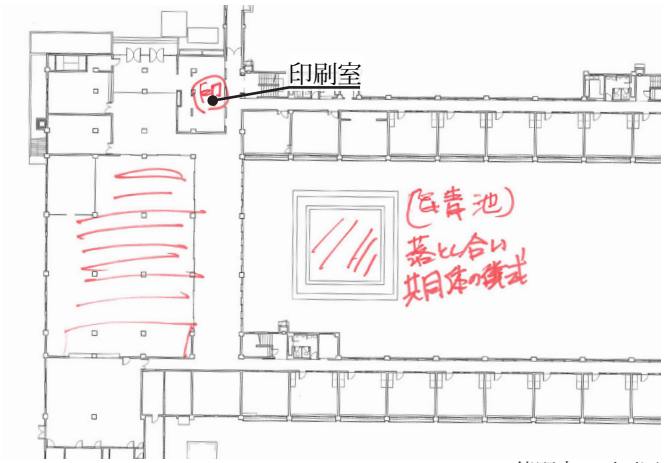
1970 年代　木村さんの「日常記憶地図」



木村さんの「日常記憶地図」（1978 年の地図を使用）地図使用承認 © 昭文社第 65G027 号



木村さんの「日常記憶地図」_広域 ver.（1978 年の地図を使用）
地図使用承認 © 昭文社第 65G027 号



熊野寮の平面図

木村さんについて

熊野寮在籍期間は 1970 年 10 月～ 1975 年 3 月。機械系メーカーで技師、海外資本で事業企画、日本商社を経て起業。学生時代は、アルバイトと学生運動に尽力していた。

聞き手：小川泰地

食事

ご飯を食べるのは食堂が多かったと思います。当時の食堂なんて、そんなに工夫してるという感じでもなくわりと単調だったような気がします。しかし贅沢はあまり言わなかったです。なんせ格段に安かったので。

あとは「凡平」[a] や「ハトヤ」[b] とかの安い定食屋さんにはよく行きました。熊野寮のすぐ脇にあってご飯がたくさん出るんです。小盛を頼んでも普通盛りくらい来て、大盛りなんて頼むと本当に山の様に来ました。それで、土方の人もたくさん来てましたね。あと、名前はわかんないんですが、通称「ジジババ」[c] ていうお店にも行っていました。このは丼っていう厚揚げと卵とじのどんぶりをよく食べました。これが結構安い。多分関西にしかないやつで、ここで初めてこのは丼を食べました。「Coffee ハギタ」[d] もよく行きました。ここはほとんどみんな熊野寮生でしたね。

食べに行くのはほとんどそういった場所でしたね。鴨川の向こう側にはお金がない寮生は行きにくいんです。そこまでの間も病院だとか大学があって、別に店があるわけでもないですし。

河原町三条

遊びはやっぱり河原町三条が多かったですね。ここに「六曜社」[e] ってコーヒー屋がまだあるでしょう。それと三条境町の「イノダ」[f]。この辺で飲むときは、えらい贅沢ですよね。酒はあまり飲まなかったから、遊びに行くとなるとカフェに行っていました。

酒屋

河原町今出川の酒屋 [g] さんで家庭教師をしていました。娘さんが 2 人で、上の子が小学校 5 年生から 6 年生くらいだったので入試の対策として僕は雇われました。ご飯も食べさせてくれたし、ものすごいよかったです。

そうしていたら小学校 2 年くらいの下の娘が嫉妬して、自分も習いたいと言い出したんです。でも、小学校 2 年生から家庭教師をつける意味なんてないじゃないですか。とはいえしょうがないからその子も面倒見てたんですが、いざ授業やると勉強がしたいわけではないんです。姉に対する嫉妬心だったんです。そういったことが原因で、その家との関係が悪くなるという不思議な体験をしました。

西院の幼稚園

西院の幼稚園 [h] でもバイトをしていました。

このバイトの何が良いかというと、夕方 5 時に僕がご苦労様ですって行くと、入れ違いで先生方は皆さん帰ってだれもいなくなるんですよ。そしたら僕は鍵を閉めて塀を乗り越えて外に出て、寮の委員会だとか学生運動の会議だとか他のバイトだとかに行っていました。夜、丸太町通を自転車で爆走して。それで学生大会を法経済学部の一番広い講堂 [i] でやっていました。ものすごくでっかい大講堂でそこに 1000 人ぐらい入るわけですよ。非常にドラマチックなところですよ。演説したり、ヤジったりとか、半ば喧嘩みたいなこともしょっちゅうありました。それで朝方採決して、ストライキになったりならなかったり。とにかく、それから幼稚園に帰らなくちゃいけないんです。朝、先生が来るより早く帰って、仮眠室みたいなところで寝てました。爆睡しちゃっているので先生たちが来て起こされてもなかなか起きないんですよ。先生に笑われて起こされておはようございますと、そんな感じでした。先生たちは夜中何かしてるのを気づいてたんですよ。麻雀とかなんかして遊んでるって思ってたんでしょうね。みんな許してくれたんです。

学生にはみんな緩い。非常に思い出深いですね。西院幼稚園の方、すみませんでした。

印刷室

寮内でビラを出すための会議をして、教養部に行ってビラをまいていました。夜の 10 時から会議ってなっていてもなかなか人が集まらないんです。さっさとやれよと思うんですけど。一応民主主義的にやるわけなので、形だけでもビラの中身を確認する手続きみたいなのがあるんです。ビラを印刷する印刷室は、寮内で今はたまり場になっているところにありました。今みたいに機械でバーっとやらないで、一枚一枚手で刷っていたんです。僕は字が汚いから、書くのはできなくて刷っていました。刷る仕事の人は一番最後まで起きていないといけないんです。だからすごくつらいんですよ。

ビリヤード場

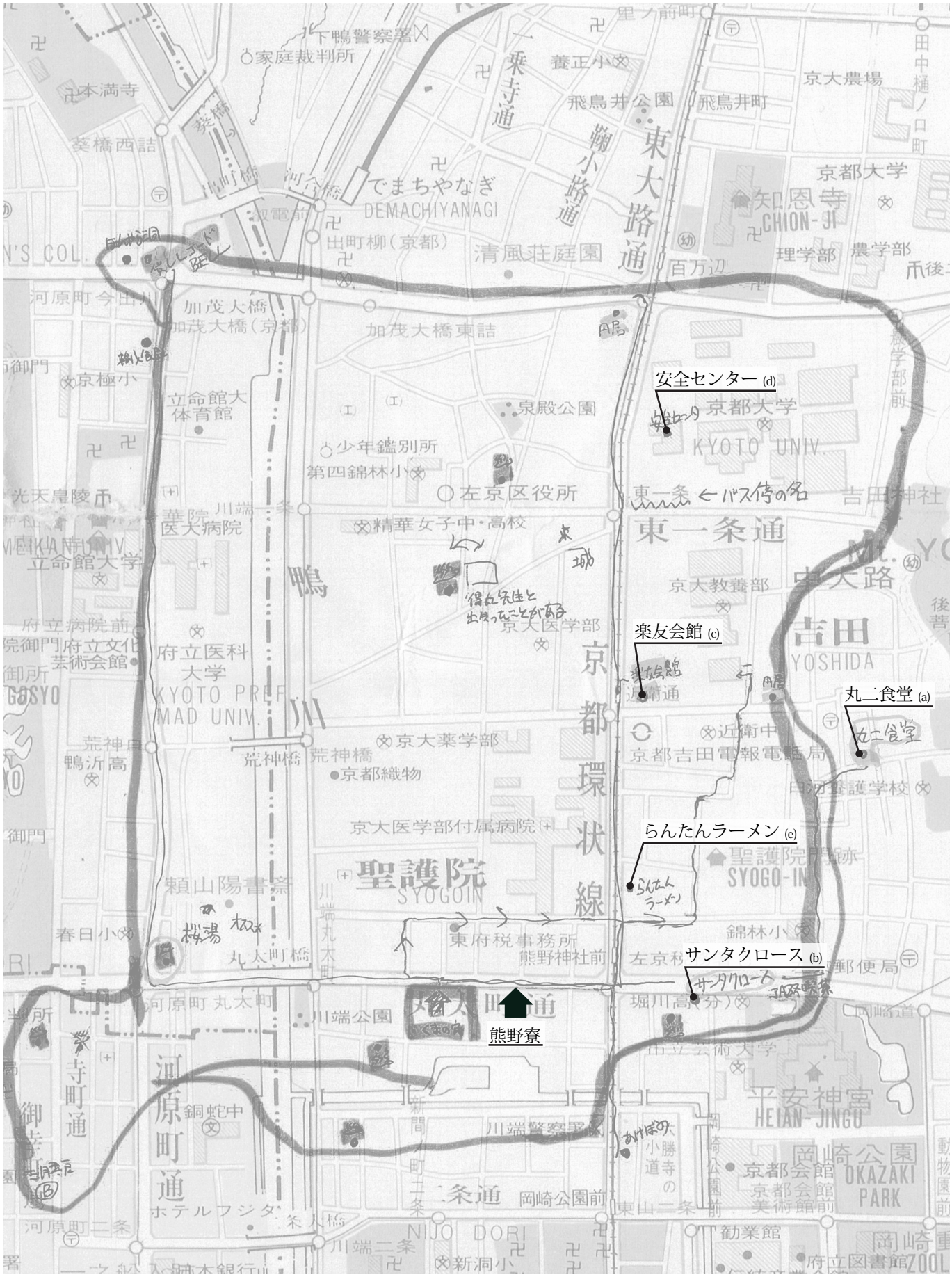
当時、京都人がやたらに夜遊びをし始めていたんですよ。若者もそうですし社会人もエネルギーが余っていたんでしょう。「プランタン」[j] というところのビリヤード場が 24 時間やってて、そこのビリヤードボーイとして接客や客の対戦相手をしていました。

夜のほうが時給がいいから僕は夜のシフトに入ってたんですが、朝まで仕事しちゃうと学校へ行けなくなっちゃう。ただ、そのバイトを始めたのが卒業前ぐらいだったので、卒業するためにそれなりにちゃんと学校行かないとダメだったんです。ビリヤードやるのもそれを仕事にできたのも楽しかったんですが、徹夜してそのまま授業に出るのがすごくしんどかったです。

愛着のある場所

教養部の門のそばに「筑山（つきやま）」[k] というのがありました。芝生の丘みたいになっていたんです。教養部っていうのは京大の学生運動の一番中心なんですよ。だからそこでよく集会やったり演説したりしていて、それを後ろから見るのにちょうどよかったんですよ。ほんとは人が入ってはいけなかったんですが、芝生で気持ちがよかったので、よく人がいましたね。だんだん自分が演説とかをしなくてよくなると、そこでふんぞり返って見ていました。あいつも演説もうまくなったなとか、変なことを言っているなとか、いろいろそういうこと考えていました。それが好きでしたね。

1980 年代　黒田さんの「日常記憶地図」



黒田さんの「日常記憶地図」（1978 年の地図を使用）地図使用承認 © 昭文社第 65G027 号

黒田さんについて

熊野寮在籍期間は 1982 年 7 月～ 1987 年 3 月。大阪府公立高校教員として教鞭を取る。学生時代はアルバイトをして自活していた。反原発運動に取り組んだ。

聞き手：川本晃、閑念真優

寮食堂 / 丸二食堂

食事は、普段寮食堂かな。当時は土曜も大学の授業があったから、土曜も寮食堂は営業していました。もちろん生協食堂も利用するんだけど、食べたい時間に混んでることが多いから、だんだん嫌になってくるんです。寮食堂は混んでると言っても知っている顔だし、あるいは「残置」という、食事を取置きしておいてもらえる特別な仕組みがあって、食べる時間を自分で選べるんです。

その残置に関していうと、当時は人の残置を盗む学生もいて、争いが起こったり、あるいは濡れ衣を着せたりといった野蛮極まりない感じもありましたね。あいつがやったに違いないって張り紙が貼ってあったりもしましたよ。

日曜日や祝日に関しては、寮食堂はやってなかったので、「丸二食堂」[a] によく行ってました。この「丸二食堂」は人の家に上がり込んで食事するような大衆食堂で、小上がりみたいな座敷にちゃぶ台があるんですよ。そこにお店のお子さんが散らかしたおもちゃがそのまま転がってたりしてました。ある時ここで食事をしていたら、アイドル女子寮生の K さんとばったり会ったんですよ。「せっかくだからお茶飲みませんか？」って誘ったんですね。ご飯を食べて、帰りに「サンタクロース」[b] っていうジャズ喫茶に二人で寄って帰った思い出があります。

今では先生たちの建物ですけど、「楽友会館」[c] って当時は実は吉田寮と繋がっていて学生も普段使いできる食堂でした。あと、今は御蔭通りにある「ひらがな館」は当時一乗寺にあって、少し高いのでデートの時に使っていました。一乗寺は今のようにラーメンの街ということではなかったですね。ただ飲み会の締めに「天下一品」に行くことはままありました。

安全センター

当時、「反原発学習会」に参加していました。

「安全センター」[d] っていう組織があって、学生課の建物の中にガス水道電気全て通っている場所を持っていたんです。これは 70 年代の学生運動の成果として、私より上の代の学生が獲得したスペースで、「反原発学習会」はそこを拠点にして活動していた団体の一つでした。そこに出入りする猫がいました。いろんな人がかわいがっていたんです。みんな勝手に名前を付けていて、僕は安全丸って呼んでいたけど文学部の人はハンスって名前を付けていました。

1982 年、1 回生の時の 11 月祭企画で、高木仁三郎さんという方の講演を聞いたことが団体に参加した一番のきっかけです。あの頃、11 月祭企画として、講演会や学習会企画で活動家の方や反原発派の学者を呼んでパネルディスカッションがよくありました。今はあまりないかもしれないけれど、当時の 11 月祭ではそういった硬派企画があったりして。

あとは、集会をして自分たちの考えを知らしめるということや、ビラを撒いたりタテカンを作ったりしていました。あまり人は集まらないんですけど、「まあそんなもんか」と思ってやってました。

タテカン作りでは、M 君がベニヤと角材で大工仕事をしてくれて、文字を書くのが私の仕事でした。当時はタテカン作るのは当たり前で、このように活動家が自分たちの考えを知らしめるためにも作られていましたし、4 月になるとサークルが新入生を募集する目的で作られたり、入試の時期には自分の出身高校を応援するタテカンを作ったり、とにかく何でもかんでもタテカンを作っていましたね。

今でいう SNS ほどの双方向性はないにしても、毎日視覚的に訴えかけることができるし、それが風景の一部でしたよね。学生運動には無縁の人でも、何かを訴えたくなったらタテカンを出していました。

通学路・普段よく使っていた道

通学は自転車でした。例えば教養部に行ってた頃は、寮から丸太通りに出て東大路通を少し北上したところで東の細い道の住宅街へ入っていき、聖護院門横を通り、その辺りを適当に通って近衛通りまで出てから構内に入っていました。こういったルートをよく使っていたんですけど、やっぱりすいてるところがいいんですよ。

塾 / らんたん

長岡天神駅前で塾のバイトをしていました。場所が離れていたのはあまり気にしていなかったんですけど、当時、塾の授業が 22 時前くらいに終わって、打ち合わせとかして帰ってくると 24 時くらいになってました。寮の辺りは今に比べると街全体として宵っ張りで、深夜営業・終夜営業してるお店も多かったんです。さっきの「残置」を食べるのもいいんだけど、例えば東大路通を少し北上すると、「らんたん」[e] というラーメンのお店があって、ここが夜中の 2 時までやっているんですよ *。今は当時のマスターの娘さんが切り盛りしているのかな。こんな感じで深夜までやっているお店というのが当時はたくさんあったなと。

*「らんたん」は現在は 11:00 ～ 14:00 の営業。

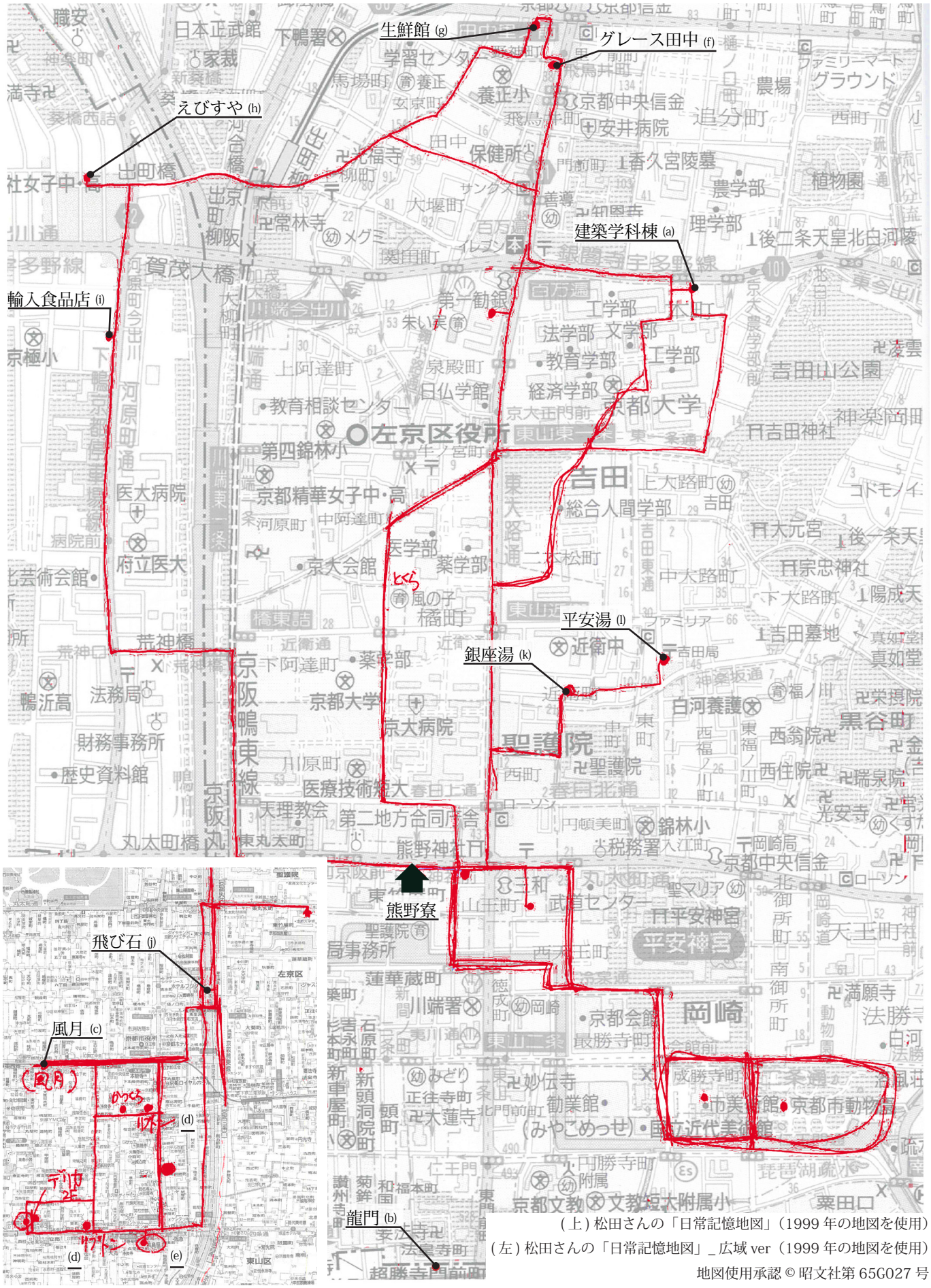
生活圏について

北は、映画が好きで一乗寺の京一会館のあたりまではよく行っていました。南は、四条のあたりまでですね。もう少し密度の高い生活圏で言うと、大学と寮とを囲うような範囲です。四条に大きな壁を感じていて、ここより南になるとあまり知らないし、一乗寺より北になってもよくわからないですね。

愛着のある場所

やっぱり熊野寮ですね。私は厳密には入学は情報工学科入学で、転学科して数理工学科を卒業したんです。でも「京都大学工学部情報工学科入学、熊野寮卒業」っていうのが本当に自分をよく表しているなと思っていて、今では本当にこう自己紹介するんですよ。

2000 年代　松田さんの「日常記憶地図」



(上) 松田さんの「日常記憶地図」(1999 年の地図を使用)
(左) 松田さんの「日常記憶地図」_ 広域 ver (1999 年の地図を使用)
地図使用承認 © 昭文社第 65G027 号

松田さんについて

熊野寮在籍期間は 2000 年から 2005 年。現在は大阪で建設会社に勤務している。学生時代はアルバイトで家庭教師をしていた。

聞き手：岡本陸

大学との関係性

建築学科だったので、建築学科棟[a]に自転車で行っていました。時計台の横を通って構内を渡るときと、吉田山の方から回るときがありました。その時の混み具合によりますが、吉田山の近くには友人の家があったので、大学に行くときとか帰るときにちょっと寄っていましたね。

徹夜はあまりしなかったですね。あまり熱心な学生じゃなくて。今思えばもうちょっとちゃんとやればよかったなって思うんですけど。4 回生の時は少しだけしましたよ。製図室にいるというよりは寮にいました。寮から大学まではなだらかな上り坂になっていて、実際の距離より倍に感じるので行きたくなくなるんだと思います。寮にいても勉強をするとかではないんですけど。

中華料理屋　龍門

ご飯は基本的に寮の食堂で寮食を食べるか自炊をしていましたね。だから外でご飯を食べるようなことはなかったですね。ご飯を一緒に食べるような学科の友達もいなくて、百万遍でご飯を食べるようなこともなかったです。

塾のアルバイトで夜遅くなって寮の食堂がやっていないときは「龍門」[b]に行くことが多かったです。「龍門」は中華料理屋さんで、塾の帰りに一緒になった寮生と一緒にご飯食べたり、食堂が閉まっているときによく行っていましたね。

あと友人の影響でお好み焼き屋はよく行っていました。「風月」[c]とか二条に「ちゃばな」っていうところがあったけどつぶれちゃいました。紅茶も飲みに行ってました。三条の「リプトン」[d]と大丸の東側の喫茶店[e]、あとは「マールブランシュ」くらいかな。食べるのと飲むのが好きなんでね。モンブランを食べに植物園のほうにも行ったりしていました。



アルバイト帰りによく行っていた龍門 (2025 年 1 月撮影)

アルバイト 家庭教師

3 回生まで、山科のほうに家庭教師をしに行っていましたね。自転車で 30 分くらいかけて山超えて行ってました。帰るときはまた山を超えて龍門に行って平安神宮のところを通って帰ることが多かったです。

熊野寮

お気に入りの場所は食堂と部屋とリビングあたりです。18 時から 26 時くらいはリビングにいて、26 時から次の日の午前中まで部屋で寝るという感じです。リビングでは 8 畳くらいのところに 6 人くらいが集まってビールとかコーヒー飲んだり、ゲームしてたりしましたね。そこまで勉強はしていなくて。部屋の近くに非常階段があって涼しかったです。階段にロープを吊って洗濯ものを干したりしてましたね。

3 回生くらいからコーヒーを飲んでました。お酒を減らして、コーヒーを多くしたら集まる人が増えていきましたね。学校の帰りに輸入食品店でコーヒーを買って、スーパーで牛乳を買ってましたね。

大学から帰るときに「グレース田中」[f]や「生鮮館」[g]、「えびすや」[h]、出町柳の輸入食品店[i]で買い物をして帰ってましたね。週に 2,3 回くらい。大学から帰るときはそのまま寮に帰るかぐるっとスーパー回ってから帰るかの 2 択でしたね。

散歩

あまり遊びにいくことはなかったのですが、よく散歩に行くことはありました。鴨川沿いを行って、飛び石[j]を渡るのは必須でした。雨の時は二条の橋を渡るけど。それで錦市場とか河原町、大丸[e]らへんをふらふらしてぐるって回って戻ってくる。

東寺とか三十三間堂とか寺社仏閣はほとんど行ったけど一回行けばいいかなという感覚でした。大して変わらないからあんまり行かなかったです。

大学を卒業してからも寮に遊びに行くことがあって、南禅寺はよく行っていました。蹴上のほうに行って南禅寺に行って適当に抜けて、銀閣寺前まで行って寮に戻るというルートですね。

あとは御所に梅を見に行ったり、岡崎に桜を見に行ったり。紅葉も好きで嵐山とかも行きましたよ。6 月はアジサイを見に行くし。でもよく行く場所みたいなのはありませんでした。

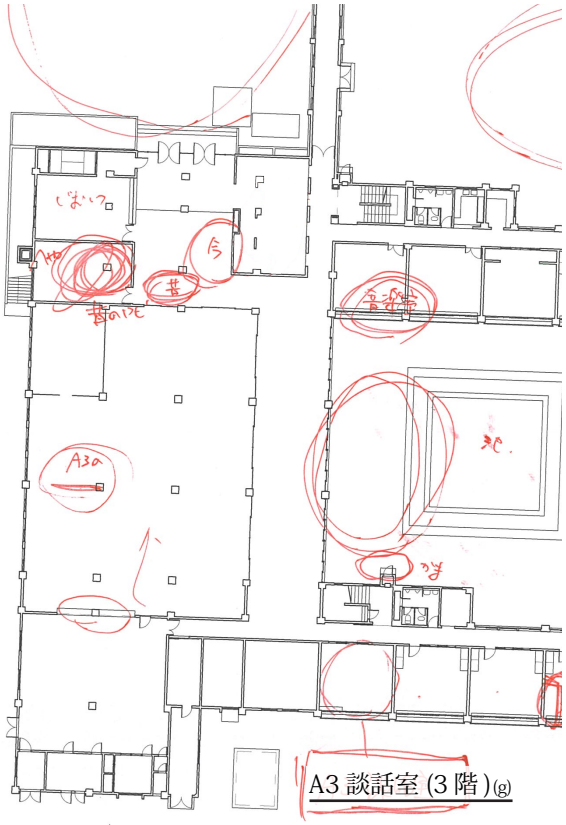
銭湯

銭湯はよく行っていましたね。寮内に風呂がなかったし行くしかなかったんですが。「銀座湯」[k]とか「平安湯」[l]とかに行ってました。ただ、それぞれ水曜休みだったり土曜休みだったりと休みが違うし、閉店時間も 0 時までだったり、1 時までだったり違うからその時に行けるところに行っていました。

愛着のある場所

寮も含めていいならやっぱり寮。含めないなら散歩道かな。本は買わないけど丸善に行くなどふらふらしてました。当時は人がそんなにいなかったし、雨も当たらないので、アーケードの通りもよく散歩してましたね。

2010 年代　前田さんの「日常記憶地図」



熊野寮の平面図

前田さんの「日常記憶地図」（2011 年の地図を使用）地図使用承認 © 昭文社第 65G027 号

前田さんについて

熊野寮在籍期間は 2014 年 3 月末から 2020 年。現在は京都で製造業の経理業務を行う。学生時代は寮で行われるイベントに積極的に参加していた。

聞き手：早川真優子

食事

基本平日は食堂で食べちゃうんですよね。だから自炊はあまりせず、土日も外食が多かったです。

「からこ」[a] というラーメン屋によく行っていました。実は、ラーメンよりも唐揚げが美味しくて、唐揚げ目当てで通っていた感じです（笑）。昔は 5 人で一緒に行くと唐揚げがサービスで付いてきたから、飯食ってない 5 人を頑張って集めて行ってましたね。

「チャンダー」[b] にもよく行っていました。寮生大会っていうのが、年 2 回、大体明け方までやっていたんですけど、朝 9 時頃に大会が終わった後、同ブロックの寮生とこの店に行ったら、案の定他にも 2 グループくらいいたことを覚えています。

あと、メキシコ料理店の「エル・ラティーノ」[c] は、長い間店に通ってマスターに顔を覚えられていたんですよ。マスターにはすごいお世話になったし、熊野神社 [d] に初詣行った時に遭遇して声をかけてもらえたのが嬉しかったです。

3 回生の頃は、談話室で夜な夜なボードゲームをすることが多かったけど、朝に三条の「みよし」とか「ずんどうや」まで食べに行って、夜が白むのを見ながら寮に帰るのが好きでした。「一神堂」[e] にも行っていました。2 時くらいまで開いてるから夜更かし中に食べに行っていました。この店が入っていたのが、ラーメン屋が次々に入るバラックみたいな建物だったんですけど、どの店も人気が出ると他の場所で店を構えるんです。多分この建物が安く借りられるから、店を出しやすいんじゃないかな。

あとは、「早起亭」[f] っていううどん屋には早朝に行ってましたね。元々は製麺所で寮の麺もここから仕入れていたみたいで。次第に寮のイベントにも来てくれるようになったのを覚えています。

談話室

大概、寮の談話室 [g] にいました。5 年くらいはこの部屋で寝泊まりしてましたし、自分の部屋は風呂入る時に着替えを取りに行く程度。最初の 1~2 年は魅力的な先輩がいて、その人のゼミ発表後に酒を飲むとか麻雀を打つ会がここで開かれていました。あとは談話室を賑やかにしたくてボードゲームとか置いてみたり、寮生が横で麻雀してる中で勉強したり。僕の大学生活の 7 ～ 8 割は談話室の中にあるイメージです。

寮付近のコンビニに行くまでの道

寮付近のコンビニ [h] に行くまでの道。ホットスポットです。この道を歩いていると吉田山が見えるんですけど、朝は山側から日が昇るので、景色が綺麗だったのを覚えています。

熊野寮

吉田キャンパス [i] に十数回くらいタテカンを立てたことがあります。ちょうどタテカンの規制が厳しくなって、白昼堂々立てに行くのが規制され始めた頃、車がいない夜中にタテカンを台車にくくりつけて、東大路通を北上して皆でガーーっと運んだのを覚えています。

あとは、寮の新入生歓迎イベントは結構大事にしていました。熊野寮生の多くは大学合格後すぐ入寮するんですけど、自分もそうやって入った時に、色々歓迎イベントがあることにびっくりしたし本当に楽しかったので、僕も新入生を手厚く歓迎したいっていう想いを持っていましたね。

新歓では、花見をしに円山公園に行ったり、皆でお酒とかを抱えて吉田山に何回か登りに行ったこともあります。あとは買い出しで、山科や四条寺町の業務スーパーによく行っていました。

一番イベント感なく新入生を歓迎できるので、飯に連れて行くのは楽しかったです。それで「十両」[j] ってご飯屋さんによく行っていました。値段が安くて、1000 円ぐらいですごい量の刺身を出してくれるんです。

寮にいる間に、地域の人との関わりは結構増えました。「くまのまつり」っていう地域に開かれるイベントや近所の幼稚園のイベントに参加して、地域の人と交流していました。熊野寮裏の保育園での交流イベントでピアノを弾いたことがあったんですけど、その時に会ったお母さんに神社で「あ！ピアノの方ですよね」って声をかけていただいた時は嬉しかったですね。

熊野寮って、どんどん人が入れ替わっていくから、よく言えば色んな考えを持つ人が来て面白いんですけど、地域とのつながりが希薄になりがちなんですよね。だから、6 年住んで、そういうつながりが芽生えてきたのが嬉しかったです。

もちろん交流するのが楽しかったのもあるし、真面目な話、寮が潰されるみたいな危機感がずっとあって、先の時代ともまた違う圧力がかかっている時代だったので、地域の方からの苦情が無いよう、近所の住民の方とか町内会長さんとちゃんと関係性を築いていこうという流れも背景としてありました。

あとは、綱を近隣小学校から借りて、四条大橋にいる人を呼んで一緒に綱引きをしたり、京都駅のクリスマスツリーの所に座ってる人たちにジャンケンをしてもらう「京都駅大階段グリコ」を毎年 12 月にやっていました。

愛着のある場所

本当に一番愛着があるのは、ずっと過ごしていた A3 談話室です。あとは寮周辺の道かな。歩いている時に見える風景が好きなんですよね。特に朝のこの道が好きです。寮に入りたての頃に、夜更かしして朝この道を案内されて「こんな生活がずっと続くのか」ってワクワクしたんです。

座談会：「日常記憶地図」を共有してみる



吉田コミュニティカフェいきな にて

各世代の熊野寮 OB の方の「日常記憶地図」を作成し、各々のインタビューを終えたあとで、お互いの「日常記憶地図」を全員で共有しました。世代ごとに比較を行って、出てきたエピソードや共通点、相違点について語り合います。

銭湯について

――銭湯のことが多く書かれていますが、当時の熊野寮はあまりお風呂の設備が整っていなかったということで、基本的には近隣の銭湯によく歩いて行かれていたとお伺いしました。

黒田　「踏水会」のすぐ横と、「桜湯」が今でもあって、疎水をちょっと南にいったところにもありました。あと東大路を越えて、平安神宮の東にあるところ。ここは一番よく行っていました。寮生割引があったんです。

松田　銀行の裏にもあったんですけど、それはもうないです。平安神宮の東のは、「寮生です。」って言えば 20 円安くなるというね。

前田　当時、いくらから 20 円安くなったんですか？

松田　多分 230 円とか 210 円ぐらいだったけれども、今は 400 円弱ぐらいしますよね。

前田　面白いですね。20 円はそのまま引き継がれるんだ。

――今残っているのはこの桜湯だけでしょうか？

前田　銀座湯もありますね。

黒田　平安湯もあります。銀座湯は近衛中の裏くらいのところじゃないかな。私は銀座湯にはあまり行きませんでした。

松田　銀座湯は 1 時までやっているということだけメリットでしたね。あと定休日が桜湯と違うので行くという。

前田　桜湯は僕も確かにちょくちょく行っていました。

黒田　志賀越道の近くの銭湯は、設備が整っていて、サウナとかがあったりしたんですけど、平日の日中に先生と出会ったこともありましたね。

食事と交流の関係

前田　「からこ」というラーメン屋さんがあって、そのラーメンについてくる唐揚げがおいしかったです。5 人で行くとサービスを貰えるから寮生の人を誘って 5 人でいくんですけど、それが結構交流のきっかけでした。

木村　寮生で色々な店をぐるぐる回るようなカルチャーができたのは最近なんでしょう？京都中のラーメンを食べ歩くとか。

前田　僕たちはやってましたね。銭湯回るとかもあると思いますけど。今やと京都中を食べ歩いたりとかは結構います。そういう意味では行動範囲は何か広がったんですかね。昔はもっと狭かったとか。

木村　いややっぱり、お金がなかったんだと思いますね。

黒田　80 年代だと、餃子の王将って京都にたくさんあるけど、その場所の店でないとしか使えない餃子のタダ券というのがあって、それが切符になっていて、京大の正門前で配っているんです。寮生で手分けして、その店でないと使えないから、お前あっちお前はあっちって言ってやってもらって、200 人前くらい餃子集めて、寮食堂で餃子だけパーティーというのをしてました。いい感じと思ってたけど、飽きるんです、餃子だから。そんな経験はあります。ちょっと聞いて思い出しました。

前田　僕も王将エピソードあります。おしゃれな王将が烏丸御池ぐらいにあるんです。祇園祭の時にみんなで行って、手分けして 30 人前ぐらい買ってました。あと、外食するって意味では、ずっと談話室でボードゲームを朝までやった後に、木屋町の朝までやってるラーメン屋さんと

かうどん屋さんに食べに行くみたいなこともしてました。僕の頃は、寮の文化として、何か新入生を歓迎する、手厚く歓迎するみたいなところがあって、円山公園とかで花見をしたり大文字山の上でコンパをしたり、宝ヶ池まで行ったりとかそういうイベント事で遠くの方に行ってたりしていましたね。

木村　そういうカルチャーってかなり後の文化だと思うんですよ。我々の頃って大体食堂で酒飲むなんてこと、厳禁とまではいかんけれども、まず飲めなかった。

黒田　そうだったんですね。私の時は、食堂とかで全寮コンパをやっていましたね。

タテカンについて

――前田さんは、タテカンの規制が厳しくなった時期だったと伺いました。

前田　そう、僕が在学中の頃に、規制がすごい厳しくなりました。僕が中心メンバーだったわけではないんですけれども、タテカンを立てまくるみたいなサークルもありましたね。ただ、当時はもう黒田さんみたいな時代ではなくて、タテカンを立てること、タテカンで何か主張すること自体にも何か政治性を帯びちゃうというか、政治性を帯びちゃうと普通の大学生はちょっと引いちゃうみたいな時代だったので。2018 年から規制が始まって、僕は 20 卒だからラスト 2 年くらいは、そんな感じでしたね。ちょっと寮のイベントとして、タテカンを夜に立てに行くとか。思い出として残っていました。

黒田　私のころは、サークルが学生課の中にあったんです。学生課の建物に入って行って、その内庭みたいなところにボックスがあって、タテカンを作る時は学生課の建物の中で作ってました。作りかけとかが廊下に置いてあって、その横を職員が歩いていてというような状況でしたね。

前田　僕が入学したころは、イベントとか、受験から入学の時期にサークルの新歓タテカンとかが立てられていました。今は頑張って立てても翌朝にはもう没収されるみたいなのを繰り返していますね。SNS などもあったりして、なんでもかんでもタテカンを立てて主張をするという時代ではなくなったのかもしれませんね。不特定多数に声を届けるツールとして有用ですし、大学に入ったときの原風景なのでなくなってほしくないですが。

木村　熊野寮で作っていたのは寮のタテカンでした。だから立てても全部大学まで運ぶというのはなかったかな。

前田　もちろん、寮に出すタテカンも、今も作っています。

木村　寮に出すやつはそうですよね。ちょうど入り口のところにかなりでかいの出してきてましたね。

「日常記憶地図」を作ってみて

――「日常記憶地図」を作ってみていかがでしたか？

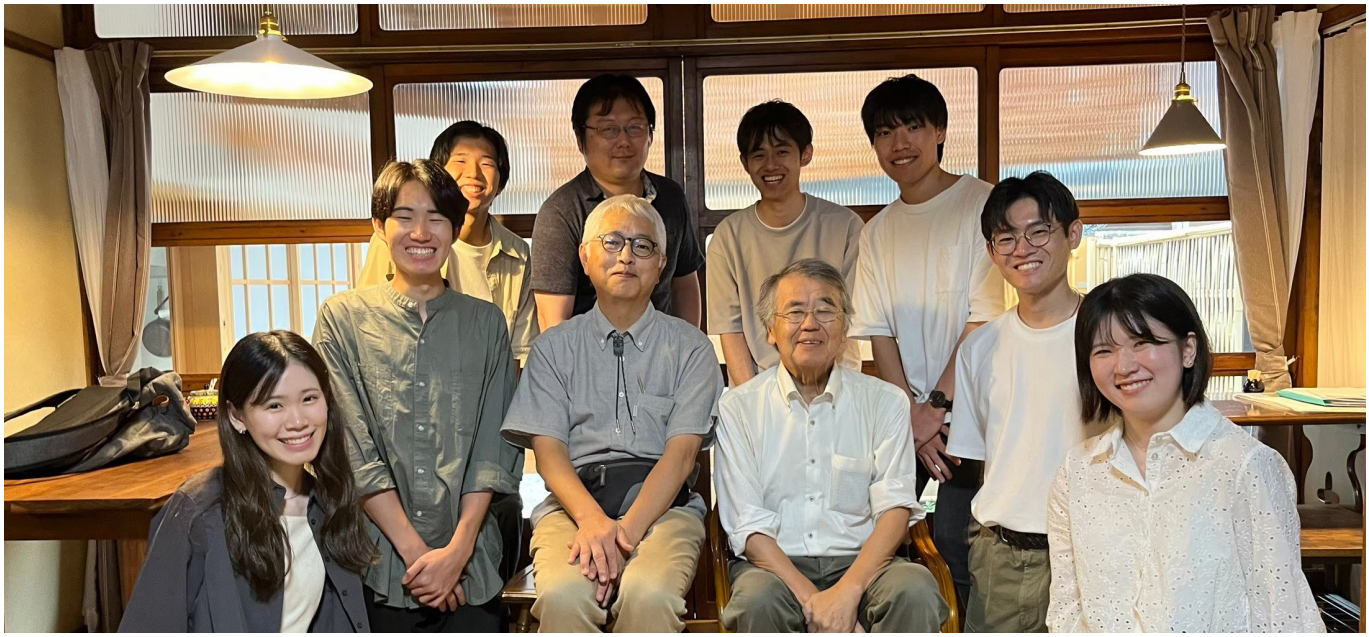
前田　「ハトヤ食堂」の話も「あけぼの」の話もそうだけど、飲食店は語る思い出が出てきやすいですね。あと銭湯とかも。

木村　熊野寮はかなりの怪物でね。なかなか過不足なくデータを表現するなんてことは難しいと思います。深みのある部分だし、その人の解釈次第じゃないでしょうか。

あと、年代でみると、やっぱり随分変わったかなと思います。とにかく、同釜会が最初始まったとき、ちょっと信じられませんでしたね。ああいう食堂でみんなで飲み合う。そういうカルチャーとは全く真逆のカルチャーでしたからね。自治管理やってて、ふざけたことをさせたら、世間から指差されるから。寮内の話もあんまり外に出さないというような感じでしたね。

松田　話を聞いてて、基本、寮を中心に動いているのはそうだろうなと思いましたけれども、やっぱりみんな街中にはあまり行かないなと。行かない人が選ばれちゃったかもしれない。その土地土地のお店の名前とかは違うけれども、範囲はあんまり変わらないなという印象で、行動範囲はまあ似たようなものかなと思いましたね。3 キロぐらいで収まるぐらいしか、やっぱり人が動かないんだなというイメージでいます。

黒田　普通に思い出話をするのとは、やっぱりピントの合い方が違うところがあって、今までだったらぼんやりしゃべっていたこととか、思い出し方が違うような、何かが変わったなと思いました。その意味では、個人的には、大変良い経験をさせてもらったというのがこの感想です。



吉田コミュニティカフェいきな にて

『日常記憶地図』のメソッド考案者

サトウアヤコ　インタビュー



写真提供：長野県立美術館

インタビュー：2024/7/24

聞き手：小川泰地、岡本陸、川村宗生、川本晃、早川真優子

――「日常記憶地図」の活動について、詳しく教えて下さい。

「日常記憶地図」の活動は今のところ大きく 3 種類に分類できると考えています。1 つ目は自分自身で記憶をふりかえること、2 つ目は地域で複数の人々の記憶を聞く活動、3 つ目は主に家族や親しい人々が互いの記憶をきくことです。

活動を始めたのは 2012 年頃ですが、2019 年に東京の美術館で行われた展覧会 *1 にて、10 人ほどの地域の方へのインタビューと、その際に「日常記憶地図」や写真を年代別に展示する企画を行ったのが 1 つの転機でした。その後、長野県で展覧会 *2 を行い、いずれの企画でも冊子の制作を行っています。また、鳥取県の米子市皆生では 2022 年に地元のキュレーターらと 10 代から 80 代までの 13 人の地域の方に対するインタビューワークや冊子制作 *3 を行いました。

最近では、千葉県市川市の和洋女子大学の学生と街の人々の記憶を聞くワークショップを行い、地域のアーカイブを作っていこうとしています。また、今も帰還困難区域が多くを占める福島県双葉町で、町役場の研修 *4 の一環として研究者らとワークショップを行っています。町外から来た主に若手の職員が、地元で生まれ育った 40 ～ 60 代の職員の土地にまつわる記憶を聞くものです。その人個人の記憶であるけれど、土地の記憶でもある、ということが大事かなと思っています。

3 つ目の家族の話を聞くプロジェクトは、ずっと個人的に行っていたのですが、他の人にもやってほしくて、公募に応募しました。この展覧会 *5 では、「日常記憶地図」を体験したことのある 3 人の方々に、家族の子ども時代の話を聞いてもらいました。この取り組みで親子であってもあまり聞いたことがない話が多いということが確認できました。これは、地図をなぞりながら、「なぜこの場所によく行っていたのか？」といった、普段は聞かれないようなことを話してもらっているからだと思います。

――「日常記憶地図」の活動に至るまでの経緯を教えて下さい。

2013 年に大阪の上町台地で行われた「オープン台地」というまちびらきイベントに参加したことが最初のきっかけです。上町台地で暮らす人々の日常を取り出すという視点で企画し、5､6 人にインタビューをしました。その時につけた名前が「日常記憶地図」でした。単発の企画としてウェブサイトに掲載して終わるつもりでしたが、反響があったことから取り組みを続けることになりました。 それと、個人的な事情ですが、ちょうどその頃父親の余命宣告を受け、昔の話を聞きたいという気持ちが湧いたことも、このプロジェクトを始めた背景の一つです。

――幼少期や学生時代の経験で現在の活動に通ずる部分もあるのでしょうか？

子どもの頃からそれっぽいことに興味は持っていたように感じます。例えば、中高時代には、家にあった赤瀬川原平の『東京路上探険記』という本を読んで路上観察に興味を持ったり、クリストファー・アレグザンダーの図を本で見て、「『ツリー構造』の考え方より『セミラティス構造』の考え方は自分に向いてそう」と感じていました。また、大学時代には同じくクリストファー・アレグザンダーの『パターン・ランゲージ』やバーナード・ルドフスキーの『建築家なしの建築』に関心を持ちました。巨匠の建築よりも、いろいろな国の住宅の間取り図の方がおもしろいと感じていたんですよね。そういうことが現在の活動に通じているのかもしれません。

あと、18 歳までに千里ニュータウン（大阪）、洛西ニュータウン（京都）、シーサイドももち（福岡）と、3 つのニュータウンに住んでいて、私自身は強い愛着を持てるような土地がないことは影響していると考えています。

――「日常記憶地図」の活動の目的について教えていただきたいです。

目的があるというより続けられるうちは続けている感じですが、特におもしろいと感じているのは、街で昔暮らしていた人たちから、旅行や本ではわからない土地の変化や背景について

話を聞ける点です。元々、2012 年以前に何度も 1 人旅をしていたのですが、その時に街の構造、例えば駅、城、商店街の関係が、それぞれ違うことに興味を持ったんです。出かけた先で資料館に行ってみたり。その後「日常記憶地図」を始めて、話を聞いた後に街を歩くと、旅行では見えない、話に出てきた場所の様子も実感としてわかるんですよね。

あとは、年代の異なる複数の人々の話を聞くことで、1 人の視点ではわからない場所の別の側面が浮かび上がり、場所のイメージが積み重なっていくんです。こういった体験は他ではなかなか得られないんじゃないかと考えています。

――ここから、「日常記憶地図」の手法について伺います。本や写真などの資料を用いる方法ではなく、地図に書き込む手法だからこその発見や面白い点はあるのでしょうか？

単に事実としての情報ではなく、場所にまつわる人の記憶が分かることだと考えています。もちろん、資料からわかることはたくさんありますし、編集段階では様々な資料を参照しています。でも、その場所で暮らしていた人々の話を聞かないと、実際に個人がその場所をどんな風に感じていたかはわからない。聞いた話の内容が資料と結びついた時はとてもおもしろく感じますね。

――他に、地図を使うメリットがあれば教えていただきたいです。

この方法でしか聞けない話があると思っています。地図を使うことで場所や環境の認識がしやすくなり、聞き手がその土地をよく知らなくても話し手の言っている場所だけはわかります。場所がわかる、ということはかなり重要なのではないかと思うようになってきています。例えば、近くに海や川がある、など話し手が言及していない場所への質問もしやすくなると思っています。また、地図の範囲内で語ってもらうので、話がどんどん逸れていくこともあまりないですね。一般的なインタビューのように、聞き手が話を引き出そうとしなくても、自然に思い出して語ってもらえることが多いと思っています。

――“ 町の弱い記憶 ” に焦点を当てている理由はありますか？

もともと、町というよりは土地に関心がありました。活動を始めた頃、大阪の上町台地周辺で「日常記憶地図」を行った際は、日常生活に焦点を当てていました。その土地で生まれ育った大学生が 1 人いて、小学生の時、中学生の時、そして今の生活という風に地図を 3 つに分けてインタビューしたんです。別の 4 歳の子とその大学生、20 年ぐらい離れているのによく似ていて、こんなに街の中心部なのに、子どもの生活はあまり変わらないところに興味を持ちました。なるべく今より遠い話、記憶の話をしてもらうようにしています。一般的には子どものころの記憶ってその人の中で思い出話として物語化されていることも多いと感じています。そういう話よりは、今初めて思い出して言語化されたような記憶の話の方が、そんなになめらかでなくても、聞いてて本当におもしろいなと思います。

――最後に生活圏を囲む手順があると思うのですが、これによって見えてくるものはありますか？

生活圏を囲むことで、その人が当時どの範囲を「世界」として認識していたかがわかるんです。もともと、この日常記憶地図を始めたきっかけも、日常というものと ” 土地への愛着 ” に興味があったからなんです。ですから、ご本人に直接囲んでもらうことで当時自分がどこでどういう風に生活していたのか、を認識してもらうことも大切だと思っています。大きく囲んだり、あるいはとても狭い範囲を囲んだり、人によってさまざまなんですよね。

――活動の中でサトウさんの印象に残っている出来事を教えてください。

インタビューが長時間になると、その人がまるで当時の風景を目の前にしているかのように話してくれることが多いんです。そういう時は、聞き手も何かイメージが浮かぶように感じるんですね。私だけではなく、他の人と一緒に話を聞いていて「今、何か見えたような気がする」と言い合ったことも何回かありました。

これがなぜ起きるのかをずっと考えているのですが、1 つの仮説としては、語り手が何か画を思い浮かべながら話していると、聞き手も自分自身の過去の記憶から似たようなビジュアルイメージを引き出してくるからではないかと思っています。(日常記憶地図によって）語り手が話す場所の記憶が風景描写に近いから、聞き手にも何かが見えイメージが浮かぶのではないかと考えていますが、まだよくわかっていないところです。誰かがさらに研究してくれたらいいな、と思ったりもしています。

――今後の展望としてなにか考えていることはありますか？

自分 (サトウ氏) じゃない人が、自分の地域や関心のある地域でやってくれるように進めていきたいなって思っています。各地域の場所のライブラリーみたいなものがつくられて、記憶が溜まっていくといいんじゃないかなと考えています。サトウにしかできない、という属人性のようなものは減らしていって。やはり、家族だったり自分の地域で残したいという意思を持つ人が出てくるのがいいなと思っています。この「日常記憶地図」って多分アーカイブしやすい性質があるんですよね。場所の記憶、人の話じゃなくて場所の話をしてもらっているからこそ、保存することができている。かつ、これまであまり語られてない話が残っていった。それはそれで意味があるかなと思います。

*1　MOT サテライト 2019「ひろがる地図」（東京都現代美術館 / 2019）
*2　「美術館のある街・記憶・風景 日常記憶地図から見る 50 年」（長野県立美術館 / 2021）
*3　「日常記憶地図 皆生 1940s - 2022　80 年の場所の記憶」ちいさいおうち（子どもの人権広場）（2023）
*4　日本質的心理学会 研究交流委員会企画
*5　OPEN SITE 7 | サトウアヤコ「日常記憶地図『“ 家族 ” の風景を “ 共有 ” する』」（TOKAS 本郷 / 2022）

サトウ アヤコ | Ayako Sato
大阪生まれ。建築と情報工学を学び「日常記憶地図」、「カード・ダイアローグ」、「マイクロ・ストーリーズ」など複数のプロジェクトを継続しながら、「場所の記憶」や、言語化、媒介的なコミュニケーションについて探求している。『日常記憶地図ノート』や展覧会の記録冊子なども制作、発行。
「日常記憶地図」サイト：https://my-lifemap.net/